
法械学園

漸 漣

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

法械学園

【Nコード】

N0991Y

【作者名】

漸 漣

【あらすじ】

魔法、機械、モンスター。なんでもありのこの時代。そこに法械学園と呼ばれる学校がある。

将来に必要なことを学びに行く者、普通に行く者がいる。

そこで、主人公漣サザナミは五大景家の内の漣家の生まれ。

法械学園で漸はどう過ごすのか？そんな彼の物語が始まる

今日から俺は新入生（前書き）

何卒よろしくお願いします。

今日から俺は新入生

機械。魔法。モンスター。
なんでもありのこの時代。

機械技術と魔法が発展してから時代は大きく変わった。
それに生じてモンスターと言われる存在が生まれ、それに対抗するために

魔法、機械、召喚獣、武器を用いて対抗している。

そのおかげで、密林の侵入や化学変化の失敗などが起きない限り人々は幸せに生きている。

世の中も大きく変わった。

過去ではPCなど電波を使っていたが今は、魔法が発達しかなりの速さで世界との交易が行えるようになり、

機械技術が発達し、未開の地の探索、生活が便利になって行った。
そんな時代である。

法械学園

ここは、将来の仕事がモンスター退治、ビジネス、機械技術など様々なことを学ぶことができる学園。

一般授業や寮制度もあるので、普通の高校と変わらない部分もある
高校。

「ここが法械学園か」

俺（漣 漸）^{さざなみ ぜん}は今法械学園の門の前にいる。

「しかし広いな」

「ほんとだねー」

「そうだな、時期になれるさ」

話してきたのは、妹の姫花ひめかと姉の麗華れいかである。

「まあ、頑張りなよ漸！あんたは次期漣家九代目頭首だろ？」

「姉さんはそういうけどな、俺には面倒でやりたくないんだ」

「そう決まったから仕方ないよ漸兄」

そう、俺は次期漣家九代目頭首なのだ。

サザナミケ ケイケ
漣家は景家の一つで五大景家である。

景家とは…

漣や雲などの景色、風景などを苗字に取り入れている家で、

景家は才能ある者が生まれることが多い。

景家のいくらかは組織を持っていたり。傘下する景家がある。

その中で特に才ある景家は五大景家という。

さらに、神天家ジンテンケは王景家と言われている景家の中で最も力、才ある者が多い。

改めて説明…

漣家は、五大景家の一つで特に戦闘特化の者が生まれる事が多い景家。

昔は四大景家だったが、圧倒的な力があり五大景家とまで言われるようになった。

組織はあるが…

名を『漣』と言う。設立時この名を作った四代目頭首は

「名前付けるのが面倒だからこれでよくねえ？」

と言っただけらしい。ちなみに傘下している景家はいない。

入学式。

簡単な挨拶から始まる。

そして、終わり教室へ行く。

「よっ！これからよろしくな！」

「ん？あんたは誰だい？」

「失礼俺の名前は猿渡銀^{さわたりぎん}だ。で、あんたの名前は？」

「俺の名前か？漸だ。よろしく」

「名前だけか？」

「お前が名前は？って聞いたんだろう？」

「それもそうだな」

二人はクスクスと笑う。

俺達は教室1―1へ向かった。

「それでは、席について下さい。出席とりますよー」

「「「はい」」」

皆は席に付く。

「1番〜〜さん」

「はいっ！」

出席を取り始める。

そして数分が経ち…

「次はえーと漣^{りん}君…え？さざな、み？」

「はい、そうですねにか？」

「「「ええええええっっっ！！」」」

耳が痛い。

「嘘、あの五大景家の？」

「すごい人がクラスの中に…」

「漸…あ、思い出した…漣家の天才ていわれている…」

「おま、漸さん凄い人でしたか、すいません」

え？なにこれ？俺こんなの聞いてないよ。普通に接してくれるんじゃないのかよ！？

まあ、いいか。

「なぜそうなる、銀？皆も普通に接してくれていいぞ？」

・・・

「え？そうなの？」

「優しいですね…」

「わ、分かった漸」

「おう、皆もそうしてくれると助かる」

これで馴染めそうだでも、おかしいな…

「なあ銀？」

「なんだ？」

馴染むの早いな。

「なんで五大景家でこんな対応になるんだ？確かにそうなるのも分かるが少しオーバーだぜ？」

「いや、他の五大景家がいてな、そのうちの一つ北条家の北条切尾ホウジョウキリオ

ていう奴が
偉そうにしているな、黒い噂が立っているんだ。だから漸にもそうかなって思ってたな」

要約すると、北条切尾という奴がいて、偉そうにしている。立場の悪用だな、うん。

それで、そいつに逆らうとボコボコにされるらしい。

「そんなことがあるのか…」

北条家あの家前にも同じこととして俺らが散々ボコしたのにまたやってやるのか…

「えーと漸…君？」

「次はあいつを完全にツブサナイトいけないのか…」

「漸？大丈夫か？」

「・・・？ハッ！？悪いなもう大丈夫だ」

「よかったぜ、どうしたんだ？」

「あいつは前俺達^{連家}が前に同じことをしてな…まったく景家というのを分かってほしいよ…」

「そ、そうか」

「あ、あの〜」

ん？あ、今出席取っていたのか…

「すいません先生。以後気を付けます」

「あ、分かってくれたなら先生は嬉しいです！では続きますね」
何事も無いように進めた。できる先生だ。

さてと、確かこの学校には…

そう思い漸は校則を思いだす。

あ、あれがあるじゃん。俺の大得意な殺り方が…

「先生！」

「漸君どうしました？」

「明日からでもアレは出来ますか？」

「アレってなんですか？」

俺は息一つ整えて言う

「——『戦争システム』です」

「え…」

「「「ええええっ〜〜〜！！」「」「」」

瞬間教室を声が響いた。

今日から俺は新入生（後書き）

法械学園を読んで下さりありがとうございます。

これからも続けるつもりなので改めてよろしくお願いします。

バトルとは…

この学園の代々から受け継ぐ伝統で互いの力を上げるために行われている。

しかし、痛みなど傷などのダメージを受けることがあるので、負傷者が出ることもある。

例えば、バトル後の気絶。切り傷。様々な傷が付く可能性があるが学園は少しでも減らすために改善を行った。

バトル形式…

バトルは五種類の方法があり。

魔法。

機械。

召喚獣。

武器。

無差別。

説明は今はいいだろう。

しばらくぼーっとしていたら休み時間が来た

さてあいつを探すか。

とりあえず校舎の裏にでも行くか…

「あいつ、むかつくからボコせ」

「はいっ！」

「え、や、やめて…」

いたよ、しかもなんかガチムチな付き人が男（弱気の）に殴りかかるうとしていた。

「おい…」

「ああ？なんだよてめえは？」

「お前、北条切尾だな？」

「俺様に向かつて態度がでかいぞ」

「五大景家の時期頭首はこんなバカな奴か」

「てめえ、なにもんだよ!？」

「じゃあバトルしよう」

「はあっ!？」

「馬鹿が俺に勝ったら俺の名を教えてやろう」

「これで乗るか？」

「おい、こいつを殴」…いや、仕方ねえバトルしてやるよ!…」
乗るのかよ!

「明後日でいいか？」

「いつでも構わねえ、バトル形式は『機械』だ」
機械とか…面倒だな。

「了解した、じゃあな。それにこいつを貰っていく」

「しょうがねえな、明後日ボコボコにされるからまあ良いが…」

「はいはい…お前行くぞ」

「え?…あ、はいっ!」

俺はその場を後にした。

廊下。

「あ、あのっ!」

「ん?どうした？」

「えと、さっきは、そのありがとうございました」

「いや、当たり前だろ困っているのに助けないとかは無い」

誰かが俺に助けを必要なら手伝うことにしているんだ。

「す、すごく、か、かつこいいです!」

え、そんなことは無いはずなんだが…まあいいかそれよりも疲れた。

「俺は教室に戻る。じゃあな」

「ま、待ってください!」

「ん?」

「名前を教えてくださいませんか？」

「仕方ないな、俺の名前は漣漸だ。じゃあな」

「え、さざな、み…!!」
俺は無視して教室に帰った。

教室。

「漸どこいつてたの？」

「カレン華蓮かどうした？」

「もう、次始まるよ！」

「そうか」

こいつの名前はフウマカレン風魔華蓮名の通り景家、そして俺の幼馴染。
俺は席に戻って行った。

「はい、皆さんはじめますよー！」

タカツキミツキ鷹月美月先生（さつき自己紹介をした&胸がそれなりに大きかった

…）が声を掛けた。

今後の日程とか、学園のしくみ、授業内容とかを説明した。

「それでは皆さんまた明後日会いましょう！」

「……はい……」

「漸君は申請書を書きに私に付いてきてください」

「分かりました」

「漸、先に帰っていい？」

「構わないよ」

「分かった。じゃあね！」

「おう」

華蓮と軽く話して、美月先生について行った。

職員室。

「ここが、職員室ですか」

デカいな職員室。教室の十倍は普通にあるな。

「そうですよ。どうかしましたか？」

「いえ、なんでもありません」

「ないですか？」

「ないです」

「えーと、ではここにサインして下さい」

「はい」

俺はせっせと申請書にサインした。

「これで、いいですよ。」

「では、さようなら」

「さ、さようなら…漸君」

笑顔で挨拶をすると、美月先生の顔が少し赤かったが漸は気付かなかった。

さてと、帰るか…

挑発とバトルの申請（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

休日に約束（前書き）

休日は二話に分けます。

休日に約束

漣家。

そこは、五大景家の名にふさわしい程の家の広さがある。

桜の木がある庭。

鯉が住む池。

機械整備室。

魔法練習場。

その他諸々。

これらは、五大景家は全て揃っている。

景家はどれか、ひとつは最低でも揃えている。

漸は家の門の前に立つ。

見るからにしては、とても大きい。3メートルはありそうだ。

門を開けると……

「「「おかえりなさい。若頭！」「」」

開くとそこには、体格の良い男達（SP ぽい服装）と浴衣姿の女性達がいた。

「荷物を持ちます」

「ああ、頼む」

俺は声を掛けられた男に、鞆を渡す。

「なあ、美羽^{ミウ}」

「なんででしょうか？」

「俺の『津波』は？」

「はい、漸様の機体は整備万全です」

「そうか」

俺は津波が配置してある機械整備室へ向かう。

機体『津波』は主に速度と破壊力を上げている。

津波の名に値する機体。

それをしばし眺め。

池に向かった。

ここは俺が好きな場所。鯉がいるから。桜の木が見えるから。

平和な気分になる。

時間が遅く感じる。

「漸兄！」

「ん？」

突然声を掛けられた。

「なんだ姫花か」

「なんだとは失礼ね」

「何の用？」

「えーと…」

姫花は躊躇う。

まさか…

「勉強教えて…だろ？」

「え？なんで分かったの？」

「お前だから」

「そ、そう？。…私だからか…」

姫花は頬を赤く染めるが

漸は気にしなかった。

「しょうがないな。教えてやる」

「やったー！ありがとう漸兄！」

とても嬉しそうにその場で飛び跳ねた。

そしたら…。

「パンツ見えるぞ」

「あ…まさか漸兄…見たい？」

「なわけないだろ？」

そんなわけない…。

（見せるようにしたのに…やっぱり）

「兄弟じゃダメかな？」

姫花は思っていたことの半分が口にでた。

「は？」

漸はいきなりの発言に疑問を抱いた。

「ふえっ！？な、なんでも無いよ」

「そうか…」

なんだろう…まあいいや。

その後俺は、勉強を夕飯まで教えた。

夜。

さて、明日はどうしようか…

うーん…久しぶりにゲームセンター行こうかな。

「お、漸じゃねえか！どうした？」

考えているときに、麗華が話しかけてきた。

「明日どこ行こうかな」と思っ

「ほう…よし、あたしも行く！」

「ハッ？」

「だーかーらー、あたしも行きたいんだよ！」

（最近漸にアピールできないからな。妹に引けを取るわけにはいかねえ）

姫花と麗華はどうやら漸に好意を抱いているようだが漸は気付かない…。

だから、二人はさりげなくアピールをしているのだ。

「仕方無いな。姉さんも行く？」

「え、いいのか？」

「いいよ」

「やったあ！ありがとな漸！」

嬉しそうに笑顔を見せて・・・

「姉さん？」

「ん？なんだい」

「抱き付くのいい加減やめてくれない？それにその当たってるし…」
麗華に抱き付けられるのは正直嬉しいのだが、豊満なバストが当たるのだ。

だから漸は困るのだ、どう対処したらいいかと。

「しょうがないだろ？ついやっちゃうんだよ。」

（漸だけにしかやらないさ）

「それなら仕方無いな…」

「もしかして、もっとして欲しかった？」

「なわけないっ！」

「冗談だから気にすんな」

「はあ、そうだろうと思ったよ」

「じゃあ明日な」

「分かった、お休み」

「お休み、漸！」

相変わらず威勢がいいな姉さんは。
もう、寝るか。

そして漸は寝た。

休日に約束（後書き）

それでは次話で会いましょう

これってデート？なのか？

今は午前9時。

俺はゲーセンにきたのだが。

麗華を待っているのだ。

「漸ー！」

姉さんが来た。

一見間違えそうだった。だれでも振り返るような美人のようだ。服だけでこんなに変わるとは…たまにはいいかもしれない。

まあ普段も可愛いけど――
なにを言ってるんだ俺は！。

「待ったかい？」

「いや、あまり待たなかったけど。それにしてもなんで待ち合わせするんだ？」

「こう、ムードってやつがあるだろ？」

「そういうもん？」

「そうそう。さあ気にしないで行こう！」

（よし、今日はたっぷりとアピールするぞ！）

麗華は密かに企んで？いた。

「はいはい」

先が思いやられる。

???。

ここは巨大ショッピングモール『アトランティス』最先端の技術と魔法で作られた。

地下には水族館もあり、多種多様なのだ。
俺達が向かっているのゲームセンター『infinity』。地下
2階すべてがゲームセンターである。

infinity。

「じゃあ漸。何して遊ぶか？」

「なんでもいいよ」

まあ、金はそこそこあるから大丈夫。

そこそこと言っても漸は五大景家なのであしからず。

「じゃあ…あれにしよう！」

「はいはい…てこれ？」

「そ、そうだけどどうした？」

「いや、だってあれは…」

麗華がやりたいと言ったもの。それは

ゾンビ射撃ゲーム『呪いの城』

これは二人でも可能。

勿論ゾンビを打つと血が飛ぶとか。肉体が弾けるとかリアルな物。
なにが言いたいかというと。

「ゾンビ系苦手でしょ」

麗華はゾンビが大嫌いなのだ。

前ふざけて脅かしたが、大号泣したのだ。

「だ、大丈夫だよ」

「声が震えてるよ」

「い、行くぞ！」

「どうなっても知らないからね」

（10分後）

「怖かったよ」

「やはりこうなるか…」

結果。姉が泣きました。

大号泣とまでは行かないが、目に涙を浮かばせている。

「よしよし」

しばらく撫でる。

いい匂いが…ハッ！危ない…危

「・・・」

（あれ？凄い怖かったけど漸に撫でてもらって…え？撫でる？）

麗華は嬉しさと幸福感が混ざっていた。

あれ顔が赤くなってきた。

それに涙も収まってきた？

（漸が撫でてる…これは役得…嬉しいな…）

麗華は様々な思いを馳せていた。

「姉さん？」

「E？」

「どうした？顔赤いぞ」

それに文字が違う気が…

「なんでもないぜ？」

「なぜ疑問系？で大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫じゃ次行こう！」

「はいはい」

そして俺達は昼まで楽しんだ。

「姉さん。そろそろ昼にしない？」

「そうだな…あれにしよう」

「なぜに高級店？」

「まあ、いいじゃん。それにお金あるだろ？」

「はいはい」

それにしても今日は姉さんとても機嫌がよさそうだ。

「昼」

「ご注文は決まりましたか？」

「じゃあ俺は和風パスタで」

「あたしも同じで」

「はいかしこまりました。少々お待ち下さい」
ウェイターは去っていった。

「姉さんなんで同じの選んだんだ？」

「漸と同じのが良いから…」

「そうか」

「…漸のバカ…」

麗華の声は漸には届かなかった。

二人に注文が来て、二人は食事した。

会計が終わり午後も遊んだ。

疲れたけど楽しかったと思っただ漸であった。

このときクラスの生徒に見られていたとは知る由もなかった。

これってデート？なのか？（後書き）

2話構成にしてみました。

次話で会いましょう。

バトルと言う名の試合

学園。

えーと、確か今日バトルだったな…。
漸は呟きながら学園へ向かった。

時は経つのが早いものだ。
もう、放課後だ。

「さてと行くか」

「漸！」

「ん？華蓮かどうした？」

「頑張ってるね！」

「分かった」

「いつてらっしゃい！」

まさか華蓮に会うとは。

まあいいや。今度こそ行こう。

俺は機械闘技場へ向かった。

機械闘技場。

名の通り機械で戦う場所。

とても、デカく、仮想空間で疑似フィールドを転送させることができる。

例を挙げれば、水中、火山、密林、空等。

さて、こいつを使うときが来たか。
俺は待機室にある『津波』を見る。

「漸君！時間ですよ」

「はいはい」

俺が返事をした人は機械闘技場の進行役のえーと……。誰だっけ？
おっと。時間が来ているな

俺は『津波』に乗った。

全身は蒼色で深海の底の色。

津波は体を全身とはいかないが装甲で覆っていて、
背中には存在を隠すような翼がある。

俺は闘技場に向かった。

機械闘技場。

俺は待機室から出た。

一瞬外の眩しい光が目に入った。

そこには俺達のバトルを見るために来た生徒経ちがアリーナで見ている。

バトル開始位置に付く。

反対側には相手の北条切尾がいた。

切尾の機体の名はゴーレム。鉄壁な防御力があり、防衛戦に入ると
傷をつけるのが難しい。

全身を覆い、『岩の守り神』というのがまさに会つ。
だが、使うのは切尾。↑これが無駄。

「ビビらないで来たのか」

「当たり前だ、雑魚に負けるなんてありえないからな」

「てめえ！ボッコボコにしてやる！」

「どうだか…」

あいつの弱点を調べたから問題ない。

「それじゃあ、始めます」

監視塔から声が響く。

「フィールドはどうしますか？」

「ランダムでいいよな？」

「なんでもいいぜ」

なんでもいいんだな…（ニヤッ

漸は不敵に笑む

「じゃあ、マグマをお願いします」

「了解しました」

数秒の時が経つ。

「では転送します」

突然フラッシュが目にかかる。

そこは――

『無数のマグマ地帯が広がっていた』

見るからにして溶ける、だが仮想空間なので大丈夫。

このフィールドはマグマが多く。地下には洞窟がある。
さながら地形は地面もあるので問題ない。

「それでは始めますよ」

進行役のなんとかさんの声が響く」

「ボコしてやるからな！」

――4

「やってみろ」

――3

「じゃあ」「さっさと」

――2

息を整えて

――1

「潰す!!」「」

――0

開始音が鳴り響くと同時に
切尾は壁を作り。

俺はマグマにダイブした。

仮想空間には機体によっては戦えないことがある。

訓練機など対応してない機体が苦手地形に侵入すると不利になるのだ。

しかし、機体によって変わる。

アリーナ。

「麗華姉！」

「どうした。姫花？」

「マグマに入っただけど大丈夫？」

「ああ、『津波』は平気さ」

「そういふもん？」

「そうさむしろ大得意さ」

姫花は納得して考えるのを諦めた。

闘技場。

これから追いついてようか…

俺はマグマの中を進みながら不敵に笑う。

バトルと言つ名の試合（後書き）

次話で会いましょう

決着の後には（前書き）

設定の説明したほうがいいですか？

決着の後には

さて、俺は今マグマの中を泳ぎ洞窟へ進む。
中にはマグマで明るかった。

俺の作戦はこう。

まず、地下をマグマでいっぱいにする。
次に、ゴーレムを地下に追い込む。
最後にマグマで囲い終わらせる。

ゴーレムは確かに防御力は高いし熱にも強い。
だが、マグマなる熱を持続的に当て続ければゴーレムは溶ける。
そんな戦法だ。

切尾は恐らく岩で周りを固めて強化してくるだろう。

よし、そろそろ行くか。

俺は再びマグマに飛び込み地上に向かった。

「チッ… あいつ逃げたか」

「バーカ！」

「なにっ!?!」

俺はマグマから飛び出した瞬間にマグマを掛けた。

「そんなんじゃ効かねーよ!」

「だろうな」

やはり落とすしかない。

「転送！『マシンガン』っ！」

俺はマシンガンを転送しゴーレムに向けて放つ
だが、相手も知っていたようだ。

「転送！『ストーンシールド』！」

相手は岩の盾を自分の前に転送した。

ダダダダッ！

キンッ！

しかし、マシンガン程度では効かないようだ。

「これはどうだっ！フィールドクロス！『マグマブレード』！」

フィールドクロス。

これは自分の転送した装備を地形にある物と合体させることである。
威力はそれぞれ違う。

俺はマグマブレードをストーンシールドに切りつける。

バコッ

当たった瞬間そこから切れるように溶けた。

「チッ！こんなじゃ防げねえのか！仕方ねえフィールドクロス『
マグマシールド』！」

相手も同じくマグマで対抗してきた。

マグマと溶岩で固めたシールド。この地形上で恐らく最硬だろう。

幾度か攻防戦が続きゴーレムがマグマシールドをもう1枚増やし、ゴーレムが新たに『自動砲台』を転送する
その姿はまるで要塞のようだ。

このままでは俺が相手を潰すまえに自動砲台に撃たれ負けてしまう。
俺も対抗しなくては、

「これならどうだ？ フィールドクロス『マグマショット』！」

ショットガンの弾をマグマに変える。

「くらえっ！」

ガンッ！ガンッ！

ゴリ押しで自動砲台へと撃ち進む。

ヒット&アウェイを何度か繰り返し。

ドンッ！

爆発して壊れた。

これで相手の攻撃手段はなくなったはず。
相手を洞窟に追い込む。

「どうした？ 防御だけじゃ勝てないぞ？」

「チッ…隠れるか」

ゴーレムは大地が裂けるような峡谷に飛び込む。
あれなら、下についても傷一つつかないだろう。

ゴーレムが飛び降り、下に付く瞬間

「なにっ!？」

峡谷に底がマグマで溜まっていた。

そしてすぐに上がるうとするが壁までマグマで崩れやすく上がれない。

「ざまあみる！」

「ぐっ…俺の負けか…。」

切尾は諦めてゴーレムが壊れるのを只待った。

戦えなくなるまで溶けた直後
強いフラッシュが目を覆う。

目を開けると闘技場。もとい仮想空間から戻ったようだ。

そして

「勝者！漣漸！」

勝利の鐘が鳴った。

「切尾」

「なんだ？」

バトルに負けたのか大人しい。

「五大景家の名に恥じぬようにしろよ」

「あ、ああ。よく分かった。すまん」

俺達は握手をした。

これで本当にもうあんなことをしないだろう。

待機室に戻って行った。

決着の後には（後書き）

次話で会いましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0991y/>

法械学園

2011年11月27日20時49分発行